名古屋大学附属図書館 友の会　ふみよむゆふべ　2008.12.3

女性が学ぶということ ―― 日本文学にみる〈女訓書〉の世界 ――

文学研究科助教　榊原千鶴

◎本日の流れ

☆ 女訓書とは
☆ 女訓書の世界　中世～近代
☆ 女訓書を読む際のポイント
★ 〈知〉の継承としての女訓書・・・・・・『からすまる帖』を手掛かりとして

☆ 女訓書とは

女性として身に付けておくべき教養や芸能、対人関係を円滑に進めるための処世術、身体の養生に関わる注意事項などを記した書。
ときに、歴史上の人物にまつわる挿話を用いて教訓を垂れる場合もある。
鎌倉期、阿仏尼が娘・紀内侍に向けて書いたとされる『にはのをしへ』を嚆矢とする。

☆ 女訓書の世界　中世～近代

→ 別紙「〈女訓書〉の世界」参照

☆ 女訓書を読む際のポイント

・ 誰から誰に向けて書かれているか。
・《色好み》をいかに評価しているか。
・《個》へのまなざしが認められるか。

＊『女訓抄』

本文を読むには・・・・
美濃部重克・榊原千鶴　『伝承文学資料集成 女訓抄』（三弥井書店、2003年）
注釈書は・・・
榊原千鶴『伝承文学注釈叢書 女訓抄』（三弥井書店、2009年度）

★〈知〉の継承としての女訓書・・・・・・『からすまる帖』を手掛かりとして

室町末期成立とされるいわゆる『仮名教訓』系の女訓書。作者未詳。
婚家での心得や処世訓を箇条書きにしたもの。近世期、烏丸光広の作とされ、以後、『からすまる帖』と称される場合が多い。手習い（習字）の書としても利用され、近世のみならず近代に至っても流布した。

明治24年（1891）博文館刊『からすまる帖』

第四、夫婦のあひだ、たかきも卑きも睦じく候はん事こそ、よその聞え、心にくうも侍らめ。たとひ千世を送り給ふとも、いさゝか主に見おとされぬやうに、朝夕たしなみ候はんこと、いよ／＼千秋万歳をたもち給ふべく候。

（中略）

紀有常の息女、

かぜふけばおきつ白浪たつた山
よはにや君がひとり行らむ

などの歌、ほめごとに候。

人のめのあまりにねたみのをはりこそふたりの恥を顕はしにけれ

この理、げにもと覚え参らせ候。されども、よになき御あつかひなど御わたり候はんには、うらみも述懐も、苦しかるまじく、よその聞えもさこそ有べけれ。

手習いの重要性を説くこの一節は、19C中頃の伝本から見え始める。

↓

「女訓と習字手本とを兼ねた教科書」としてのありかた

（石川松太郎「『仮名教訓』系の女子用往来」『江戸時代女性生活研究』1994年、大空社）

→

第十一……（中略）……さて又、こゝろにかけて習ふべきは、筆の道にて候。いかなる公衆人中にても、おめずして候。しとやかに書なしたるは、いとけだかく見ゆるものにて候。上にも下つかたにも、無手に候へば、ふ自由なるのみか、その身もいやしく成くだるものにて候。我、ひとのやうにたちなんものは、第一、鳥の跡なり、とあるふみにも見え候。ま、常々けいこ有たく候。